

王権・言葉・心をめぐる近世政治思想史研究

著者	大川 真
号	19
学位授与番号	263
URL	http://hdl.handle.net/10097/37058

おお
大

かわ
川

まこと
真

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 263 号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 文化科学専攻
学位論文題目	王権・言葉・心をめぐる近世政治思想史研究
論文審査委員	(主査) 教授 佐藤 弘 夫 教授 大 藤 修 准教授 片 岡 龍

論文内容の要旨

本論文は、日本近世思想史研究史上において、正当に位置づけられることのなかった中期の政治家・思想家新井白石の思想を、政治思想面に着目して捉え直すとともに、後期の尊王(皇)論が白石の思想を批判対象とし、それを反定立させることによって昂揚していく流れを、立体的・構造的に解明したものである。

本論文の試みは、丸山眞男以来の古学派―国学を基軸とする近世思想史像とは一線を画して、新たな視角から近世中後期思想史を捉え直すとともに、近世から近代への激動の時代状況のなかで、近代天皇制国家がどのようなイデオロギーの醸成によって成立したのかという問いに詳細な回答を提示しようとしたものである。

本論文は、たんなる個別の思想分析にとどまらず、膠着状態にある近世思想史研究に新たな方途を示すとともに、日本史研究からの近世国家論との架橋となることも念頭に置いている。

その際に、本論文は「王権」「言葉」「心」という3つのキーワードを掲げる。徳川政権の再編から崩壊へ至る近世中後期において、思想家が天皇・将軍に対してどのような政治言語を創出(定義付け、関係付け)してきたのかについて、また政治的に無縁であった天皇と民心との一体化が説かれるようになった思想史の流れについて、各思想家に対する個別的な論証のなかに、上記の問題を根本命題として通史的に描くものである。

以下、本論文の構成に従って内容を要約する。

序論

序論では研究史を概観した上で導き出された本論文の課題とそれを解決するための立場・視座を論じ

た。

まず日本史側からの近世天皇制研究を概観した上で、①「権威」という語がステレオタイプ化し、その内実が問われなくなっているという現状、②研究対象が制度・機構面などに細分化される形で進められてきたことによって、近世国家における「将軍」と「天皇」とがどのように関連づけられるかという大きな議論が見られなくなってきたという現状を取り上げ、これを打開するために、①「権威」の全体的把握のためには、精神性・主観性—天皇制を支える・必要とする個人の内面・集団の論理—についても考察しなければならない。②「将軍」と「天皇」との関連をめぐる問題は、国家の支配イデオロギーからの考察が不可欠である、という2点を指摘し、そのために思想史研究からの研究が有効となると述べた。ただし実は従来の思想史研究が近世天皇論不在のまま進んできたのであり、日本史側の研究と思想史側の研究との交流が行われなかった原因もこの点に求めた。

戦後の日本近世思想史研究は、丸山眞男『日本政治思想史研究』と尾藤正英『日本封建思想史研究』という2冊を基に、その修正や批判を中心に発展してきた。丸山も尾藤氏も天皇制国家に鋭く対決した研究者である。ただし戦後の研究者に多大な影響を与えた『日本政治思想史研究』と『日本封建思想史研究』のどちらも、天皇論を不在にしたままで論述されている。それはなぜか。一つは古学派に対する価値評価が主題となっていることに原因がある。古学派を代表する近世中期の思想家荻生徂徠にはいわゆる朝幕関係論に関する言及は無い。徂徠からは天皇論を摘出することは不可能に等しい。一方、本居宣長はまさしく「天皇」を中心命題とした思想家であるが、宣長は、「天皇」が政治的領域に組み込まれることを拒絶しており、個人のアイデンティティー確立のために「天皇」を持ち出す。宣長から国家論的イデオロギーを摘出するのもやはり限界がある。

もう一つの問題点として、古学派—国学以外の思想家（特に「朱子学者」）に対する正当な評価が全くなされていなかったことが挙げられる。本論文で扱う、徳川政権中枢にいた新井白石、寛政期朱子学者である中井竹山ら、尊王（皇）論者として括られた頼山陽や会沢正志斎は、どの思想家も近世政治思想史研究で通史的に正当に位置づけられることはなかった。

付言すると、上記の思想家を選択する意図は、初めから私のなかにあったのではない。「佐幕」（反天皇制）的思想家として位置づけられることが多かった新井白石の国家論を文献史的に読解していくうちに、彼の思想のなかで、「正名」（「名」を正す）という原理が中核に存在することに気づいた。さらに注目すべきは、「尊王（皇）」思想を代表する後期水戸学の創始者藤田幽谷の著書『正名論』と題されているように、同じく「正名」を主題としているのである。天皇観めぐって、「佐幕」—「尊王（皇）」という対立した構図に置かれた白石と幽谷がなぜ同じく「正名」を思想原理としたのか。従来の研究では全くこの問題を見逃してきた。私は、「佐幕」—「尊王（皇）」という二項対立的な図式を破棄し、両者が「正名」という同じパラダイムに立ちながらも、なぜ異なる国家像を提示したのか。その問いに答えるためには、「正名」をキーワードにして、従来の通史とは全く異なる見取り図を示す必要があると考え、18世紀から19世紀で「正名」に関する重要な議論を展開した上記の思想家を帰納的に分析の対象としたのである。以下、それぞれの思想家の個別研究史における論点を示す。

新井白石は、「近代学問の父」（宮崎道生）としてその科学的合理性に対する評価が中心であり、政治思想からの評価の歴史はきわめて浅い。政治思想面からの解明は、ケイト・W・ナカイ氏によって近年ようやく行われたばかりであるが、白石は全国家権能を将軍に集中化させようとしたとするナカイ氏の見解は、資料を誤読した上で立論されており、白石の主観とはかけ離れている。中井竹山に対しては、大阪町人の自由な気質を反映した批判精神の持ち主として描かれることが多いが、白石への批判によって提示される国家像に対する内在的理解は乏しい。後期水戸学の大成者と言われ幕末志士たちのバイブル

とも言われる『新論』の著者会沢正志斎に対しては、近代天皇制国家イデオロギーとの連続を見出すナラティブが定型化しているが、正志斎が18世紀末からの国家論の形成原理を転回させた形で新たな国家論を創出したことの意義は全く看過されてきた。頼山陽に対しては、「勢」・「天」原理の解明に焦点を絞り研究が進んできたが、彼が政治的君主(将軍)と身分的君主(天皇)とにそれぞれ異なる論理を振り分けていたことの意味は論じられてこなかった。

丸山、尾藤説を真に発展継承させるためには、両者が描けなかったもう一つの近世思想史像を描く必要がある。丸山によれば、徂徠以降の思想史は、「自然的秩序の再生」として、下降線を辿り、近代的な成熟した政治思想から遠ざかるということになるが、徂徠以降の思想を正當に理解しなければ、「天皇」に真に対峙し得ないという視座に本論文は立つ。

以上の課題設定を基に、本論文は、新井白石で提起された「正名」による実効的政治支配の正当化論が、大政委任論が成立し近代天皇制国家が胎動する18世紀末(藤田覚氏)になると、中井竹山らによって反転されて天皇を頂点とした身分制に基づく国家像が提示され、さらに19世紀に入り、会沢正志斎、頼山陽らによって、政治言語を作為することへの拒絶と天皇による民心統合論、政治的責任から乖離した天皇論が表出されたことにより、天皇制国家イデオロギーが成立段階へと至るダイナミックな思想史を描くことを目的とするものである。見方を変えれば、本論文は近世後期において尊王(皇)論、名分論が発生し昂揚するメカニズムを説き明かしたとも言える。

第一部 新井白石の政治思想史的研究

第一章 新井白石の鬼神論再考

本章では通途の白石像を一変するために、「合理主義者」「実証主義者」「博識な思想家」という像の典拠となっていた白石の鬼神論を、詳細に検討する。

近世日本儒教の在り方に関して、宗教性を稀薄にし儒〈学〉的な雰囲気強くしていったとする指摘がある。この近世儒教観の典型的な儒者として従来考えられてきたのが、新井白石である。白石の鬼神論には「合理主義」的態度が見られるとされてきたが、怪異に対する思考を辿った時、「合理主義」的態度ではなく、現実社会に深刻な影響を与える実在として「厲鬼」を警戒する強い危惧が看取されるのである。本章は、白石の鬼神論を内在的に理解し再構成し、従来の「合理主義者」といった平板なイメージでは包括できない思想的営為を解明し、「政治」と「宗教」に関する白石独自の思想的営為を解明したものである。宗教制度の在り方を思想の在り方に安易に連続させて捉えていた従来の近世儒教観に対しても根本的な見直しを迫る。

白石の鬼神論の特徴は、天地の「気」の円滑な循環を重視することにあるが、循環の障害を来す原因に、人の怨念の持つ「気」のエネルギーがあり、「生霊」や「厲鬼」の実在を説き、特にキリシタンの厲鬼が災禍を及ぼしていると考えた。

この厲鬼が及ぼす災禍のなかで白石が最も危機感を抱いたのが、「将軍」継承の不順である。「将軍」継嗣の不順を解決するために、白石は、理想的な礼樂を実践し鬼神への祭祀を行うことで天地の気の円滑な循環を促し、結果、「将軍」に多子がもたらされると説く。

白石の鬼神論は、「気」の感覚に基づいて構成される。人の怨念の持つ「気」のエネルギーが実在することを述べ、厲鬼による災禍を現実社会に影響を与える脅威として認識し、厲鬼への祭祀を説くが、それが次期将軍の継嗣問題に対する解答、ひいては閑院宮家創立論として構築されている点で独自性がある。

経書注釈に終始する儒者の言説とは異なり、実は徳川政権の永続化へと指向されている白石の思想的営為は、政治家白石たる所以であり、彼の思想の強かな戦略性がよく表れている。

第二章 新井白石の王権論

前章では、鬼神論への考察を通じて、「合理主義者」「朱子学者」という白石のレッテルを剥がし、彼の思想の持つ政治性に注目した。本章では彼の政治政策で根幹たる位置を占める国王復号を検討し、そこから窺知しうる白石の「朝幕」論・国家論を解明する。

1. 新井白石の国家構想—国王復号・武家勲階制の検討を通じて—

近世の思想家にとって最大のアポリアの一つは、「天皇」と「将軍」のそれぞれを如何に定義し、両者を如何に関係付けるかということであった。正徳の治を推進した新井白石は、そのアポリアに対して、国王復号、武家勲階制の提唱して応えようとした。本章は、白石の国王復号説・武家勲階制の検討を通じて、白石が意図した国家構想の全体像を再構成することを試みたものである。

白石は、天命が授与されたとされる徳川「将軍」に、「天子」ではなく「国王」という「名」を付した。「国王」号は、「天皇」より身分的に一等下位に位置づける一方で、「礼楽」を除く全ての政治の実権を掌握し、国家の実質的な統一者である者に相応しい称号として提出された。また「天皇」は「礼楽」を担う者の称号として定義され、その政治的権威は、国政や軍事に与らないとされた。「将軍」＝「国王」号の提唱には、「朝廷」を源泉とする官位制ではなく武家勲階制の施行によって、全ての武士階級との間に確固たる主従関係を構築し、かつ「朝廷」を除く全ての日本人民をその支配下に置くことを正当化しようとする白石の国家構想が存在していたのである。栗田元次・宮崎道生の両氏の研究では、国王復号説を対外的な観点に偏重して考察し、「天皇」と「将軍」の身分的上下関係の解明を焦点としたが、上記の白石の国家構想には考察が及んでいなかった。また、白石の政治戦略が、「将軍」に「礼楽」「征伐」を兼備させ、「将軍」に統治機能の総体を一元化させようとするものであったとするケイト・W・ナカイ氏の見解も、白石の国家構想を正しく理解したものではない。

白石の国家構想は、「天皇」→「朝廷」、「将軍」→武家を含む全人民、という近世初頭以来の実質的な二元的支配構造に対して、国王復号説・武家勲階制などの理論的根拠を与えることにより、それを正当化しようとしたものと言える。

2. 文武論をてがかりとした近世王権論研究

この節は、前節の補論的性格を持つ。前節で明らかにした新井白石の二元的王権論の特徴を、同じく二元的王権論を提示しつつも、天皇家の保持する礼楽の文化的教化権を重視した熊沢蕃山、山県大弼という前後の二人の思想家との比較から明らかにしたい。

将軍と天皇という、いわば二人の「君主」が存在する王権構造に対し、近世日本の儒者がどう対峙したのか。伝統的な儒家の王権論である天命説は一元的王権を前提にしているため、天命説に拠っても近世日本の王権構造は理解できない。斯かる王権構造に適応したのが文武論である。文武論は、天皇が「文」を、将軍が「武」を、それぞれ保持することで王権が成立するという二元的王権論である。この文武論に基づき構成される二元的王権論は、天皇の権威を強調した思想家だけではなく、将軍権力の正当化を図った思想家にも見られる。

天皇の権威を強調した思想家として取りあげたのが、熊沢蕃山と山県大弼である。両者は、文武論に基づく二元的王権論を前提としながら、「武」を司る徳川政権を野卑とし、「文」（「礼楽」）を制作するのは不可能であると述べる。教化の必要を訴える蕃山と大弼は、朝廷の保持する「文」（「礼楽」）、とりわけ雅楽を重視する。

將軍権力の正当化を図った思想家として取りあげたのが、新井白石である。白石も文武論に基づく二元的王権論を前提としている。しかし白石は「文」（「礼楽」、特に雅楽）の源泉的役割は天皇に属すると原則的に考えながらも、徳川政権が武家儀礼を改正することにより、武士の風儀が改善されると考えた。白石は徳川王権の絶対化を志向したわけではないが、武家の職掌を重んじ、武家儀礼を改正することにより、武士の風儀が改善される。換言すれば「武」の内部において「礼式」改善が可能と考えていた点は、蕃山・大武の徳川政権観と逕庭がある。また蕃山と大武が、「武」による徳川政権の統治方式を批判したのに対し、白石は「武」による統治方式を、本来の武家の職掌に適った名実一致の方式として称賛し、徳川政権を正当化する。

近世日本の王権論に対し、思想史の分野では、依然として、「天皇」と「將軍」のどちらに思想家が重きを置いたかという表層的な視座から論ずる傾向が見られる。こうした傾向から脱却するためにも文武論に基づく王権論の解明は必要となろう。天皇の権威を強調する言説や將軍権力の正当化を図る言説に対して、天皇の「文」・將軍の「武」の内実、その価値評価、さらに関係図式について、どのように思想家が捉えていたのか、我々が理解することによって、近世日本の王権論の本質面に迫ることができるのである。

第三章 伊兵衛殺人事件考—新井白石の君臣観—

前章までに、「合理主義者」というステレオタイプ化した白石像を破棄して政治思想家としての面に注目し、白石の国家論が天皇家と徳川家との二元的王権制を取りつつも、將軍に政治統治、外交の主権性が存することを正当化する論理によって構成されていたことを明らかにした。本章は君臣観の検討を通じて白石思想の核心に迫るものであり、第一部の総論的な位置を占める。

正徳元年（1711）、信州松代の商人伊兵衛が、妻むめ（ウメ）の父兄によって殺された。この伊兵衛殺人事件に関する白石の意見書を検討した際に注目されるのは、伊兵衛事件を君臣の大義に関わる問題として把握する特異な認識である。本章は、この白石の認識に即して、伊兵衛事件に関する言説を、君臣論として読み直し再構成したものである。多くの著作を残した白石であるが、意外なことに君臣観を体系的に述べた書は著しておらず、研究史においても白石の君臣観の本質を解明した論攷は未だ無い。また、近世日本の君臣観に関する代表的研究においても、白石の君臣観は対象とされていない。白石の君臣観の解明は白石研究史のみならず近世思想史研究においても重要な課題である。

伊兵衛事件に関する白石の断案は、林鳳岡への批判を基調として展開される。鳳岡への批判を通じて、白石は、朱子学的な父子天合・君臣義合観が君主を無みする危険性を持つと糾弾する。その帰結として、綱齋と同様に、朱子学的な父子天合・君臣義合観からの超克を図るが、ただし白石は、忠孝一致の論理構成を採らずに、身分的・社会的状況（子、臣、妻）の如何によって、奉事する対象（父、君、夫）を一つに画定する方法を採った。君臣観に即して言えば、専一に君主へ忠を尽くすことが求められる。白石は、奉事する対象が複数（「二君」・「二尊」）存在する在り方は、主従関係の破綻を招きかねないと厳しく批判する。この人倫観を演繹すれば、忠孝一致論は、奉事する対象が父と君主の「二君」（「二尊」）に分散し、君臣間の主従関係を希薄化する恐れのある論理機制ということになる。如上の理由から白石は忠孝一致論から距離を置いたと推測し得る。

白石の政治的目標は、何よりも「名」と「実」との一致であった。徳川政権の「実」に相応しい「名」の創設が第一に急務とされたのである。中国の士大夫と日本の武士との社会的存在形態の違いを認識して、武士の「実」に即して君臣観という「名」を創設する思想的営為も、正名思想の外延に位置づけられる。

第二部 「正名」の転回史—近世後期思想史をめぐって—

第一部では新井白石の政治思想を検討し、その結果、実効的な政治権力に正当性を与える「正名」という原理が、彼の思想の中核に置かれているという結論を導き出した。第二部では、十八世紀末からの尊王(皇)論・名分論がこの新井白石の「正名」思想を反定立することで昂揚していく流れを立体的・構造的に解明する。

第一章 叫ばれる「正名」—統一的国家イデオロギーの成立—

18世紀末の政治史の状況は統一的国家イデオロギーの醸成という文脈で理解し得る。そして統一的国家イデオロギーの成立以後から明治新国家に至る道程で大きな役割を果たしたのが後期水戸学派である。従来の研究では荻生徂徠の思想との関係性が最大の論点となってきたが、徂徠思想の影響を実証的・内在的に解明したわけではなく、限界がある。そこで本章は18世紀末の思想空間(「叫ばれる正名」という思想空間)を共時態的な視座から解明するという方法を取り、「正名」思想の範疇で名分論・尊王論が展開され統一的国家イデオロギーが醸成されていくことに注目したい。この思想空間で主導的な役割を果たしていたのが中井竹山である。本章は竹山の主著『逸史』をめぐる竹山と菱川秦嶺との論争を解明し、その後で藤田幽谷『正名論』の思想的位置を定位していく。その際、「叫ばれる正名」で批判の対象として念頭に置かれていた新井白石の思想との関係を重視する。

白石が提示した名実一致の正名論に基づく「朝幕」の二元的王権論・国家像に対し、竹山は、名実乖離の正名論に基づき天皇を身分的頂点とした一元的王権論・統一的国家像を以て抗拒する。ただし対象としたのは天皇と将軍の間柄であり、将軍と武家との間柄にはあまり注意を払っておらず、ここに統一的国家イデオロギーとして不備がある。それを厳しく批判したのが秦嶺である。秦嶺は武家が将軍へ臣従すべき名分を正当化するものとして、天皇の策命を持ち出し、将軍と武家との関係においても尊王論・名分論を展開する。幽谷は、将軍が「天子の政を摂」という大政委任論的な国家運営を「実」とし、それに対応する「名」として「摂政」号を創出し、日本の歴史を貫いて「天皇の尊貴性」が実在しているため名分が保たれると主張しているが、この点は徳川政権の政治主導による統一的国家イデオロギーと相反するものではない。しかし、徳川政権の国家運営を「勢」として表現しており、権勢を誇るものはやがて衰退するという「歴史主義の毒」(野口武彦)を思わせるものがある。

第二章 後期水戸学における思想的転回—会沢正志斎の思想を中心に—

後期水戸学研究では明治天皇制国家とのイデオロギー的連続の如何を考察することが主たる関心事となっているが、そのような系譜学的なナラティブが定型化されていく一方で、後期水戸学の思想個性そのものは見えにくくなり、また後期水戸学を一枚岩として扱うことで、後期水戸学の内部的差違が看過されている。本章はこのような問題意識に基づき、会沢正志斎以降において「正名」に関する大きな思想的転回が存在することに注目しそれを解明するとともに、この思想的転回の後景にある近世の諸思想の影響を論ずるものである。

18世紀末以降の思想家が問題視したのは、イデオロギーの分散・飽和であった。寛政朱子学派および藤田幽谷は、「正名」を思想的原理とし、言語的作為によって統一的な支配イデオロギーを構築しようとした。しかし文政期以降で活躍した正志斎は、従来の「正名」を転回させることで、換言すれば、言語的作為を否定し、秩序の「自然」なる性格(自己生成的な性格)を強調することで、イデオロギーの統一化を企てた。斯かる「自然」観形成には本居宣長の影響があるが、正志斎にとっては宣長学も畢竟、「自然」ならざる作為的な異端に過ぎなかった。徂徠学もその作為性ゆえに批判の対象となるが、言語によらない

教導方法として礼楽を措定する点において、正志斎は徂徠学から影響を受けていた。この礼楽でもっとも民心統合に有効な手段として考えられたのが、天皇を頂点とした祭祀であり、かかる祭祀論の根底には仁斎学から継承・変奏した「活物」観の存在がある。天皇を頂点とした祭祀により、「活物」であるがゆえの不安定さを内包する民心に一定の方向性を与え、国家的統合に必要な「忠」「孝」などの「実徳」を自発的に発現していく民心の「活物」的エネルギーを正志斎は重視した。

第三章 頼山陽における政治なるもの

厳格な父との確執。江戸遊学期での放蕩生活。突然の出奔と幽閉。女弟子への恋…。頼山陽という人物は文学的ロマンをかき立てるエピソードに事欠かない。だが彼を思想家として正當に立ち位置を与えようとするのは容易な作業ではない。曰く、尊王思想家。曰く、朱子学者…。本章ではそうした平板なレッテル貼りを拒否しつつ、「天」や「勢」などの思想原理に注目してきた先行研究とも一線を画し、次の一文に山陽の政治思想の核心を見るものである。

唐の柳宗元、封建を論じて曰く、「勢なり」と。余れ曰く、「封建は勢なり。勢を制するは人なり」と。
(原漢文) (『日本外史』卷十三、徳川氏前記)。

則ち山陽は、歴史的作力である「勢」が、人為による「制」を因子として成立することを強調する。野口武彦氏が「悪魔的」な政治思想家カール・シュミットと同定したように、政治思想家頼山陽の特長は「制」への鋭敏な洞察力に在る。この「制」とは、思想原理として抽出する性質を持つものではなく、政権運営術・臣下操作術・勢力配置術などの具体的な政治技術の総体である。山陽政治学の一点目の特徴は、いかなる「制」によって政治権力が保たれるかという命題に貫かれている点にある。

また一方で、山陽は「名」「実」関係論の範疇から日本史を描き出す。山陽は、政権の実効的支配＝「実」の掌握には天皇家・武家の別なく有効な「制」が必要であると強調しながら、一方で、「制」とは関係せずに天皇家の「名」は永続されるという名実乖離論を提示する。政治権力論とは切り離された形で、天皇家の名目的な正統性を確保する回路を作ろうとした。これが第二の特徴である。

山陽の思想は、政権担当者には政治の有能性を厳しく要求する一方で、天皇には政治的責任とは無縁な世界で穏やかにその地位を保たせようとする。丸山眞男が苦闘した、天皇制を淵源とした政治的無責任の体系。丸山が対決すべきは「悪魔」的思想家頼山陽の斯かる思想であったのかもしれない。

結論

本論文では、政治思想史上の観点から、「近代」を18世紀末、具体的には天明8(1788)年に松平定信によって初めて大政委任論が表明されたことを端緒とし、それに呼応して中井竹山、藤田幽谷らが統一的国家イデオロギーを創出していく寛政期をおよそ「近代」の第一期と考える。いわゆる「内憂外患」が叫ばれる時期である。この区分論は、藤田覚氏の研究の成果を享けているが、藤田氏の研究では明らかにされなかった国家論(朝幕論)イデオロギーへの内在的な理解を通じて、思想史側から改めて提唱したものである。そこでは実効的な政治支配を正当化する新井白石の正名論を反定立することによって、天皇を頂点とした一元的な身分制国家像が示された。本論文で「近代」的と規定する所以は、白石が描き出した二重王権制を批判者たちが解消し、統一的国家像を提唱したことによる。ただし白石も彼の批判者たちも、「正名」という同一のパラダイムで議論していたことは注目しておく必要がある。つまりこの時期までは、国家論イデオロギーのなかに、国家像を規定するための政治言語を創出する方向性はあったということである。この時期の議論は、政治言語の内容の是非をめぐって起こったものであった。第二段階は19世紀初頭で活躍した会沢正志斎や頼山陽らのイデオロギーの誕生に見ることができる。会

沢正志斎は、政治言語の創出の一切を否定し、「正名」の無効性を宣言する。その代わりに言語ならざる世界へ関心を移し、天皇による祭祀体系を構築することにより、民心統合がなされるべきだと主張する。また頼山陽は「正名」というパラダイムにのりながらも、天皇を政治的責任から回避する回路を作り出し、天皇制の永遠化を企てる。天皇と民心の結合、天皇の政治的無責任性を説くのが「近代」の第二段階である。

論文審査結果の要旨

本論文は、江戸中期の政治家・思想家新井白石の思想を抜本的に再検討することによって、独自の白石像を示すとともに、孤高の思想家とみなされてきた白石を思想史上に位置づける作業を通じて、彼を機軸とする新たな近世後期思想史の見取り図の構築を目指したものである。

まず「序論」では、近世思想に関する研究史を概観した上で、そこから導き出された本論文の課題が示され、それを解決するための立場と視座について論じられる。第一部「新井白石の政治思想史研究」では、白石の思想そのものを論じた論考が集められ、既存の白石像を打ち砕き、新たな像を提示することを企図した意欲的な議論が展開される。第二部「「正名」の転回史—近世後期思想史をめぐって」では、第一部の議論を踏まえ、十八世紀末以降の尊王論・名分論が、白石の「正名」思想を批判するなかで形成されていくことを立体的・構造的に解明しようとする。「結論」では、本論文の成果が総括されるとともに、その延長線上に、幕末・明治以降までの流れが展望される。

従来の近世思想史研究は、個々の思想家が「天皇」と「将軍」どちらに重点を置いたかという基準や、朱子学→徂徠→宣長という近代化論的な問題関心によるコース設定によって、思想家ないしは思想史を論ずる傾向が強かった。そうした視点では、新井白石を適切に史上に位置づけることは困難であり、それゆえ白石はしばしば孤高の思想家のレッテルを貼られてきた。

それに対し本論文は、「正名」論、文武論など、より思想家・思想史の実態に即した切り口を用いることによって、新井白石を近世思想史の流れに位置づけることに成功している。また白石以降の近世後期思想史に対しても、数々の新たな視点・独自の見解を提示するとともに、白石と対比することによって、後期水戸学における思想的な転回をきわめてクリアに描き出している。

本論文では、全体を通じて意欲的かつ野心的に、通説に代わる新たな見解が提示されるとともに、その作業の蓄積を通じて、独自の近世思想史像を構築しようとする姿勢に貫かれている。個々の論証過程においては若干の不備や、空回り気味の部分もみられるが、論文のスケールは大きく、方法や視点の面でも、個別の議論においても、また全体の見取り図に関しても、新しい豊富な知見が提示されている。

その成果が斯学の発展に寄与するとこと大なるものがあることは疑問の余地がない。よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。